# 伊能忠敬だけじゃない

## 江戸時代の地理学者・長久保赤水

## 日本地図の先駆者、功績評価

長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」（高萩市教育委員会提供）

茨城県高萩市出身で江戸時代の地理学者、長久保赤水（1717～1801年）が近年、知名度を上げている。初めて実測で日本地図を作った伊能忠敬より42年早く、情報収集による精度の高い「赤水図」を作り、庶民や後世の知識人に広めた功績が評価され始めた。

赤水は高萩市赤浜の農家生まれで、幼い頃に両親を亡くした。親族に育てられながら、学問に興味を持ち、水戸藩の学者らの下で儒学や天文学、地理学を学んだ。30代半ばで正確な日本地図を作ろうと決意し、情報収集や各地の旅を経て、52歳で初めての地図を完成。功績が認められ水戸藩主の侍講になった。

赤水の地図は天文学を取り入れたことで、日本で初めて経線と緯線が書かれ、比較的正確なのが特徴。中でも1779年に初版が完成した「改正日本輿地路程全図」（通称・赤水図）は実用性が高く、江戸時代の庶民に広く流通した。幕末の志士を育んだ吉田松陰（1830～59年）が兄に宛てた手紙には「これが無くては不自由」と、赤水図を旅に役立てていたことが記されている。

JR高萩駅前にある長久保赤水像＝茨城県高萩市

1821年に完成した伊能忠敬の地図は、伊能自らが実際に各地を歩き歩幅で測量したことで有名。一方で赤水は、自分で集めた地名などの情報を地図に盛り込んだため、内陸の情報も豊富だ。長久保赤水顕彰会の佐川春久会長(70)は「友人が多く、旅人にもお茶をごちそうして話を聞くなど、情報収集能力にたけていた」と強調する。

赤水の関連資料693点は、2017年に県指定有形文化財になるなど徐々に価値を評価され、国の文化審議会は今年3月、同資料を国の重要文化財に指定するよう文部科学相に答申した。

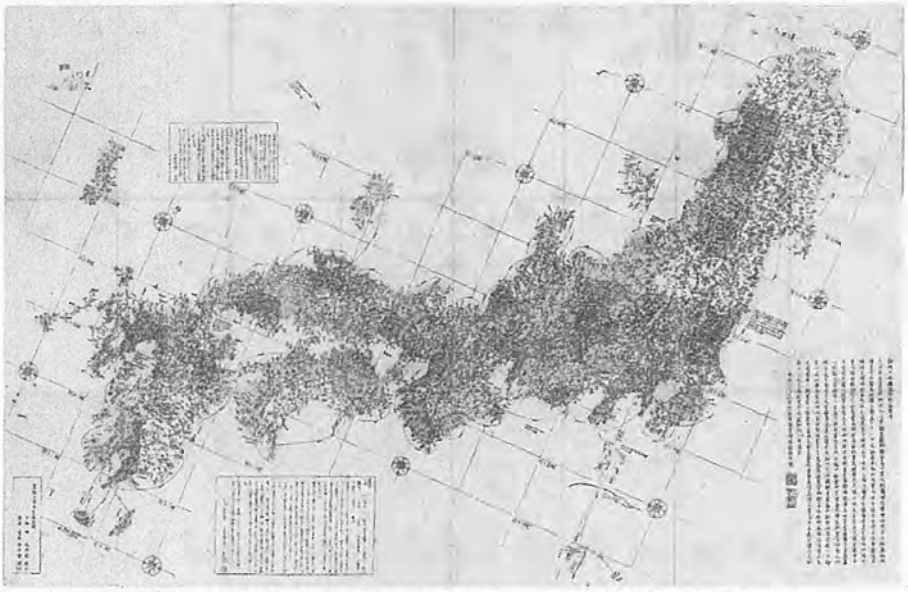
さらに知名度を上げようと顕彰会は同月、赤水が地図に書き残した不思議な海上現象を元にした絵本「りゅうのひかり」を出版。縦約84センチ、横約128センチの赤水図のレプリカ発行を目指し、資金300万円をクラウドファンディングで募る。

佐川さんは「世界で通用する、誇れる先人の一人。地理の歴史の中に赤水図をしっかり位置付けたい」と語り、将来的には大河ドラマ化も目指している。

### 赤水の手紙

（長男・藤八郎へ…續長久保赤水書簡集現代語訳から抜粋）

（前略）心の目の付け所が肝要なのである。すべからく書を読む時には、難しく疑念が生じたところは不審帳へ書き出して置いて、その次のところを順々に読むのが良い。読んだ書物が多くなれば、後には前の疑問に思ったところも自然と理解できるようになるものである。これを大成の日という。常日頃から読書を怠らなければ年が経つにつれて大成するもである。（略）大金を貯えもつことは大悪のもとになると思う。金が貯まったならば時々人に施してやることが上策である。



長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」（高萩市教育委員会提供）

## 伊能忠敬より早い日本地図先駆者――

# 長久保赤水 知名度じわり

### 茨城・高萩 高い精度、功績を評価

江戸時代の地理学者、長久保赤水（1717～1801年）が近年、知名度を上げている。初めて実測で日本地図を作った伊能忠敬より42年早く、情報収集による精度の高い「赤水図」を作り、庶民や後世の知識人に広めた功績が評価され始めた。

◇

赤水は茨城県高萩市赤浜の農家生まれで、幼い頃に両親を亡くした。親族に育てられながら、学問に興味を持ち、水戸藩の学者らの下で儒学や天文学、地理学を学んだ。30代半ばで正確な日本地図を作ろうと決意し、情報収集や各地の旅を経て、52歳で初めての地図を完成。功績が認められ水戸藩主の侍講になった。

赤水の地図は天文学を取り入れたことで、日本で初めて経線と緯線が書かれ、比較的正確なのが特徴。中でも1779年に初版が完成した「改正日本輿地路程全図」（通称・赤水図）は実用性が高く、江戸時代の庶民に広く流通した。

幕末の志士を育んだ吉田松陰（1830～59年）が兄に宛てた手紙には「これが無くては不自由」と、赤水図を旅に役立てていたことが記されている。

1821年に完成した伊能忠敬の地図は、伊能自らが実際に各地を歩き歩幅で測量したことで有名。一方で赤水は、自分で集めた地名などの情報を地図に盛り込んだため、内陸の情報も豊富だ。長久保赤水顕彰会の佐川春久会長(70)は「友人が多く、旅人にもお茶をごちそうして話を聞くなど、情報収集能力にたけていた」と強調する。

赤水の関連資料693点は、2017年に県指定有形文化財になるなど再評価が進み、国の文化審議会は今年3月、同資料を国の重要文化財に指定するよう文部科学相に答申した。

さらに知名度を上げようと顕彰会は同月、赤水が地図に書き残した海上現象を元に、絵本「りゅうのひかり」を出版。縦約84㌢、横約128㌢の赤水図のレプリカ発行を目指し、資金300万円をクラウドファンディングで募っている。

動きは県外にも広がっており、吉田松陰ゆかりの松陰神社（山口県萩市）でもレプリカが展示される見通しだ。佐川さんは「世界で通用する、誇れる先人の一人。地理の歴史の中に赤水図をしっかり位置付けたい」と語り、将来的には大河ドラマ化も目指している。

## 赤水の手紙

（長男・藤八郎へ…續長久保赤水書簡集現代語訳から抜粋）

（前略）昼夜読書し、田畑へ出ても書物を離さず、荷運搬や鼻取り（田植え前の代掻きの際などに、竹竿で牛馬を誘導）をしながらも書物を読みながら仕事をし、五十年一日のように学問に励み勤めて来て、君侯（殿様）の侍講をも勤める身になった。これもつまりは柴田平蔵兄（松岡七友〈七賢人〉の一人、柴田愿恭〈東江〉。平蔵は通称で二歳年上）の恩と教えによるものである。（略）学問というものは、道理法則を窮め、惑いを解き心を堅める薬なのだ。学問をしない人は心の要が弱く、日を追って成人するに従い、その心が弛み、他の悪事に染まる故に、千万長者もいつとはなく衰えてしまうものだ。これをきちんと矯正して家を中興する事は、学問をした人でなければ出来ない。学問はうわべだけの華やかさを抑え、（虫損）学問や徳のある行いを専らにし、酒と色事と賭博などを極めて嫌う人でなければ、学問を成就することは難しいであろう。

# 20年以上かけ作成

## 地図への情熱

先駆者
長久保赤水「重文指定」

■上■

## 高い実用性、広く普及

江戸時代の民の生活を支えた「ベストセラー」―。高萩市出身で江戸時代の学者、長久保赤水（1717～1801年）は1779年、日本地図「改正日本輿地路程全図（赤水図）」を完成させた。国の文化審議会は3月19日、赤水の関係資料（同市歴史民俗資料館保管）を国指定の重要文化財（美術工芸品）に指定するよう萩生田光一文部科学相に答申。赤水に魅了され、顕彰活動を続ける関係者に話を聞きながら、赤水の業績と人物像に迫った。

長久保赤水の自画像（高萩市教育委員会提供）

### ▽「伊能図」より前

赤水図は実用性に富み、流通に、旅にと民に愛用された。

地図作成で著名な伊能忠敬による「伊能図」よりも42年早い業績で、赤水は地図作成の先駆者と言える。

赤水が地図を学び始めたのは35歳の頃。先人による地図や地誌、官製の国絵図など多くの資料を基に編集。自身の実体験や多くの旅人・知人からの話も参考に、20年以上の歳月をかけ赤水図を作成した。

赤水図は129万6千分の1の縮図で、10里（約40キロ）が1寸（約3センチ）。大きさは縦84・6センチ・横128・8センチ。国境や関所、城下町、名所など10種類の記号が使われている。

日本地図としては初めて経緯線を用いられ、方角が正確に分かる。天文学の知識を取り入れた点も画期的とされる。

赤水は初版発行後も情報収集と改訂を熱心に続けた。1791年発行の第2版では、初版で4200カ所だった地名を6千カ所まで増やしている。

原寸の3倍大の赤水図を見詰める三浦邦明さん＝高萩市内

「赤水は、人に役立つものを作りたいという気持ちを強く持っていたのだろう」。長久保赤水顕彰会理事の三浦邦明さん(68)が語る。

### ▽面積は9倍

三浦さんは昨年、赤水図を3倍に拡大した地図を印刷会社に個人で発注して作り、同会に寄贈した。縦2メートル53センチ、横3メートル86センチとなり、面積は9倍と圧巻だ。

赤水図は宿場のある地名や地形などが細かく記載されており、原寸では見づらいのが難点だった。

三浦さんは「3倍にしたことで文字が読みやすくなった。例えば自分の出身地の地名などを見られるので、赤水図に興味を持ってもらうことに役立った」と目を細める。

3年前までは赤水について「ちらっと知っている程度だった」と三浦さん。深く知るうち、業績や育った環境に面白みを感じた。

赤水は幼くして家族を次々に亡くした。だが「継母は『農民だから教育はいらない』との方針ではなく、本を読ませ医者の私塾に通わせた。良い教育によって赤水という名の『ロケット』がドンと打ち上がった」。三浦さんは赤水の生涯をこう表現する。

---

**赤水の手紙**

（長男・藤八郎へ…續長久保赤水書簡集現代語訳から抜粋）

（前略）必ず必ず村役人などへ申し出て訴訟などにかかわり合うのは以ての外である。ご公儀の権力を借りて貧しい人から益（金）を取ることは、棄てるよりはるかに劣るということを心得るべきである。（略）第一に子孫は誰によらず村役人などになりたいと思う心、或いは金儲けしたいという考え、こういうことが平常心の中に生じないように教育しなさい。ただ農業にのみ励み、質素倹約を旨とし、余暇には学文（学問）に精進し楽しむことばかり心がけることが良いのである。

R2.4月15日　茨城新聞

# 好奇心、学問究める

## たゆまぬ努力

先駆者

長久保赤水「重文指定」

■中■

長久保赤水（1717～1801年）は現在の高萩市赤浜の農家に生まれ、幼い頃から勉強好きだった。

「読書に夢中になるあまり、頼まれた家事を忘れてしまうことがあったらしい」。赤水の研究を長年続けてきた赤水顕彰会顧問の長久保源蔵さん（89）が語る。

赤水は11歳になるまでに両親と弟を亡くし、その後は継母に育てられた。源蔵さんは「継母は赤水のやりたいようにさせ、勉強好きを見守っていたのではないかと思う」。14歳頃には医師の鈴木玄淳が開いていた私塾に通うようになり、後に「松岡七賢人」と呼ばれる仲間と学問を追究した。

漫画「長久保赤水の生涯」で、赤水が東北を旅した際の記録「東奥紀行」の内容を表したページ

## 藩主に制度改善「直訴」も

もとは儒学を深く学んだが「好奇心で手を広げていった結果、天文や地理が肌に合っていたのかな」（源蔵さん）と、地図作成の道に進んだ。

### ▽「農民疾苦」

61歳の頃、赤水は水戸藩6代藩主徳川治保に学問を教える侍講に抜てきされた。赤水を推挙した郡奉行、皆川教純は「いち農民学者が御殿に上るのは有史以来初めてのこと」と述べたという。

赤水は政治にも明るかった。1778年、治保公に対し、「農民疾苦」という書を上程。年貢取り立ての運用がいかに農民を苦しめているか記し、改善すべき制度を具体的に列挙した内容だ。直訴などが禁じられていた時代で、処分を受ける可能性もあったが、最終的には改善に結びついたという。

源蔵さんは「個人的な欲で言わず、農民の苦しみを取り払ってほしいと訴えた。頼まれたわけでもなく頑張ったのは偉い」と評する。

新しい伝記漫画の発行に向け作業する黒沢貴子さん＝高萩市内

### ▽漫画で伝記

高萩市の主婦、黒沢貴子さん(53)は2017年、赤水顕彰会の事業として伝記漫画を描いた。柔らかな絵柄と、化け猫を物語のナビゲーターとして登場させるなどの工夫で赤水の生涯を分かりやすく描いた。

資料を読み込み、かみ砕いて漫画として表現する作業の中、赤水の人生は「ドラマチックで、成功のプロセスを踏んでいる」と感じた。11歳で父を亡くし、生きていくため「変わらざるを得なくなった」。地図作成では多くの人の助けを得た。そうした出来事が赤水の力になったと想像する。

漫画家を目指した時期があったが簡単な道ではなく、挫折を経験。赤水と自身を比べたとき、「私は漫画を描きたいと思っても、誰かの役に立とうと思ったことはなかった」。

伝記漫画を読んだ人から「赤水のことがよく分かりました」と言われることで、役に立てたのだと感じられた。赤水との出会いが、自信と喜びにつながった。切り口を変えた漫画を来年新たに発行するため、再び構想を練っている。

### 赤水の手紙

（長男・藤八郎へ…續長久保赤水書簡集現代語訳から抜粋）

（前略）たくさん菊漬を食べて寿命を延ばそうと思っている（赤水は『地理志』成就のために長寿を願って菊漬けを愛用した）。（略）学問のない者は百歳を経ても生きた甲斐はない。（略）だから君子（学識のある人格者）は生涯学問を怠らぬ人なのだ。それゆえ天の助けもあるのだ。私は自分自身に経験があるからこういうのだ。

R2.４月16日　茨城新聞

# 知名度向上へ奔走

## 郷土の誇り

先駆者

長久保赤水「重文指定」

■下■

## 講演や銅像、陶板建立も

「赤水先生の業績をなんとか『国指定』にしたい思いがあった」。

国の文化審議会は3月19日、長久保赤水の関係資料を国の重要文化財（重文）に指定するよう萩生田光一文部科学相に答申。夏ごろまでに指定される。1992年に設立し、赤水の功績を伝える活動に取り組んできた長久保赤水顕彰会の佐川春久会長（70）は、悲願だった目標の達成を喜ぶ。

「長久保赤水記念館」として活用する構想がある屋敷＝高萩市赤浜

「すごいことをやったのに赤水はあまり世に知られていない。非常にもったいない」との思いを強く持つ。2012年に会長に就任して以来、赤水の知名度向上のためさまざまな事業の実現に奔走し続けてきた。

伝記漫画や書簡集などの発行、赤水図のレプリカ作成、ゆかりの地を巡るウオーキング会、講演などやれることは何でもやった。日本地図学会との連携も進めている。

### ▽地域資源に

赤水一族の一部の子孫は今も高萩市に暮らすほか、赤水関連の史跡や施設が市内に点在する。

赤水の墓は潮騒が聞こえる海沿いの林の中に立つ。同会会員や市民有志による実行委員会は2012年、JR高萩駅前の広場に赤水の銅像と赤水図の陶板を建立した。子孫から「現在使っていない屋敷を赤水のPRに活用してほしい」との打診があったため、今後、市と調整しながら「赤水記念館」として改修していく構想もある。

佐川会長は、同市が赤水を生んだ地であることをPR材料とし、これらの史跡や施設を資源として活性化に生かしていくべきだと考え、市にも提案を重ねている。

### ▽後世へ伝える

重文指定で「国民の財産になった」（佐川会長）ことを好機とし、同会は今後も積極的に事業を展開していく。

幕末の思想家、吉田松陰も赤水図を重宝したと考えられることから、松陰が東北での旅について書き記した「東北遊日記」の足跡を記載した赤水図のレプリカを制作する予定。現在、インターネットで資金を募るクラウドファンディングで支援を求めている。

佐川会長は、市内の小学生がテレビ番組のインタビューで「赤水は街の誇りです」と答えていた姿がうれしく、印象に残っている。

「茨城が生んだ世界に誇れる先人の一人」。赤水の功績、そして努力を惜しまず人のために働いた生き様を永く後世に伝えていくため、佐川会長と同会会員たちの活動は続く。

（この連載は日立支社・小原瑛平が担当しました）

### 赤水の手紙

（長男藤八郎、次男・四郎次、孫の作之丞【藤八郎の長男】へ…

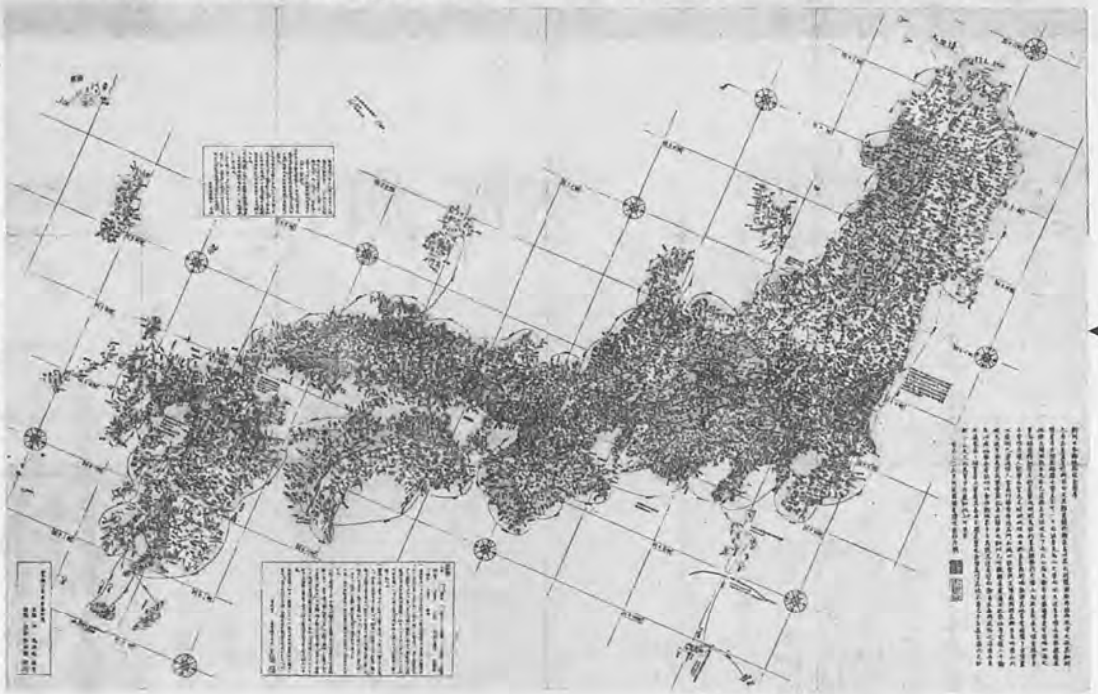
続長久保赤水書簡集現代語訳から抜粋）

（前略）書を読むことは、名人たちの口頭での教えを受けるのと同じである。隙さへあれば気を許さず励むよう。書を買い求める金銭を惜しんではいけない。

R2.5月9日　中日新聞

# この地図 ← 作ったのだあれ？

# 長久保赤水 知名度じわり



江戸時代の地理学者、長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」＝高萩市教育委員会提供

茨城県高萩市出身で江戸時代の地理学者、長久保赤水（一七一七～一八〇一年）が近年、知名度を上げている。初めて実測で日本地図を作った伊能忠敬より四十二年早く、情報収集による精度の高い「赤水図」を作り、庶民や後世の知識人に広めた功績が評価され始めた。

## 伊能より42年早く

赤水は高萩市赤浜の農家生まれで、幼い頃に両親を亡くした。親族に育てられながら、学問に興味を持ち、水戸藩の学者らの下で儒学や天文学、地理学を学んだ。三十代半ばで正確な日本地図を作ろうと決意し、情報収集や各地の旅を経て、五十二歳で初めての地図を完成。功績が認められ水戸藩主の侍講になった。

赤水の地図は天文学を取り入れたことで、日本で初めて経線と緯線が書かれ、比較的正確なのが特徴。中でも一七七九年に初版が完成した「改正日本輿地路程全図」（通称・赤水図）は実用性が高く、江戸時代の庶民に広く流通した。

幕末の志士を育んだ吉田松陰（一八三〇～五九年）が兄に宛てた手紙には「これが無くては不自由」と、赤水図を旅に役立てていたことが記されている。

JR高萩駅前にある長久保赤水の像＝茨城県高萩市で

一八二一年に完成した伊能忠敬の地図は、伊能自らが実際に各地を歩き歩幅で測量したことで有名。一方で赤水は、自分で集めた地名などの情報を地図に盛り込んだため、内陸の情報も豊富だ。長久保赤水顕彰会の佐川春久会長(七〇)は「友人が多く、旅人にもお茶をごちそうして話を聞くなど、情報収集能力にたけていた」と強調する。

赤水の関連資料六百九十三点は、二〇一七年に県指定有形文化財になるなど徐々に価値を評価され、国の文化審議会は今年三月、同資料を国の重要文化財に指定するよう文部科学相に答申した。

## 地元顕彰会がPR

さらに知名度を上げようと顕彰会は同月、赤水が地図に書き残した不思議な海上現象を元にした絵本「りゅうのひかり」を出版。縦約八十四㌢、横約百二十八㌢の赤水図のレプリカ発行を目指し、資金三百万円をクラウドファンディングで募る。

動きは県外にも広がり、今後、吉田松陰ゆかりの松陰神社（山口県萩市）でもレプリカが展示される見通しだ。佐川さんは「世界で通用する、誇れる先人の一人。地理の歴史の中に赤水図をしっかり位置付けたい」と語り、将来的には大河ドラマ化も目指している。

インタビュー連載 14

# 今、気になる人に会いに行く。

日本地図学会会員
長久保赤水顕彰会会長
**佐川 春久** さん

## 経緯線や主要街道が書き込まれた地図「赤水図」は、吉田松陰も愛用した幕末のベストセラー。長久保赤水（ながくぼせきすい）の偉業を次の世代に伝えたい。

**プロフィール●**
1949年、東京都築地生まれ。高萩市役所に38年間勤務し、2010年に定年退職。
その後、高萩市歴史民俗資料館館長などを経て、現在は高萩市教育委員会生涯学習課の任用職員。長久保赤水顕彰会会長、戸沢政盛公顕彰会会長、高萩郷土史研究会の事務局を務めている。長久保赤水顕彰会として、「マンガ長久保赤水物語」、オリジナルフレーム切手の企画・編集、赤水図のレプリカ、絵本「りゅうのひかり」を発行してきた。

**高萩市出身の儒学者・長久保赤水は、日本で初めて経緯線のある全国地図を完成させた人物である。彼に関する資料693点が、この3月、国の重要文化財に指定されることが決定した。**

教科書で目にする伊能忠敬の地図は、江戸幕府の秘図でしたので、実際に庶民が見ていた日本地図は「赤水図」だったんです。「伊能図」は測量図で、「赤水図」は編集図。第五版まで出ており、地図の中に多くの情報が入っています。

### 原寸大のレプリカを手にしたが、詳細な記述に驚かされる。

赤水は多くの資料を研究し、経緯度という天文学を学び、旅人や修験僧の話を参考にして地図を完成させています。国境や名所旧跡だけでなく、港からの距離や主要街道・河川など情報量が多く、物流や経済活動に使われていたと思われます。

**それだけの偉業を成し遂げた人物でありながら、全国だけでなく地元でも知らない人は少なくない。**

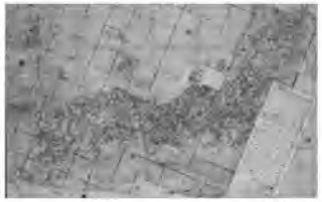
赤水は、農業をしながら勉学に励み、その功績を認められ61歳で水戸藩主の侍講（学問の師）に取り立てられた人物です。彼が残した資料、そして郷土を研究してきた先生方の資料を次の世代に伝えるため、1992年に「長久保赤水顕彰会」を発足しました。

**国の重要文化財指定記念誌として絵本を発行するなど、顕彰会の活動はとても活発である。**

これまでに、レプリカ制作をはじめ、漫画や切手などを発行し、赤水の偉業を伝えてきました。念願叶って国の指定がいただけましたが。大河ドラマ、教科書への掲載、記念館の開館など、さらなる目標に向けて顕彰会では会員を募集しています。

### 佐川さんが、そこまで顕彰会の活動に力をいれるのはなぜ？

実は私の出身地は東京でして、結婚して高萩市に移りました。外の人間だからこそ気づく、地元の魅力があるのだと思います。今は、お年寄りから地域の歴史の話を聞くことが少なくなりましたが、子供たちに赤水をはじめ偉大な先人のことを伝えたいと考えています。



▲「改製日本分里図」。「改正日本輿地路程全図」の原図となった、経緯線の入った初めての日本地図。貼紙や胡粉による修正が多くあり、期間をかけて作成したことがわかる。

▲「赤水図」と呼ばれる「改正日本輿地路程全図」第二版のレプリカを発行。江戸時代と同じデザインののし袋に入れて販売している（1,000円）。

▲「赤水図」の中に残された「閼伽井嶽（あかいだけ）の龍燈」をもとに絵本「りゅうのひかり」を制作。

▲JR高萩駅前には、長久保赤水の銅像と地図が設置されている。

**「長久保赤水顕彰会」**
問 TEL.090-1846-6849（佐川）
※吉田松陰の「東北遊日記」の足跡を辿れる赤水図レプリカ発行のため、クラウドファンディングで寄付金募集中。
赤水図　キャンプファイヤー　検索

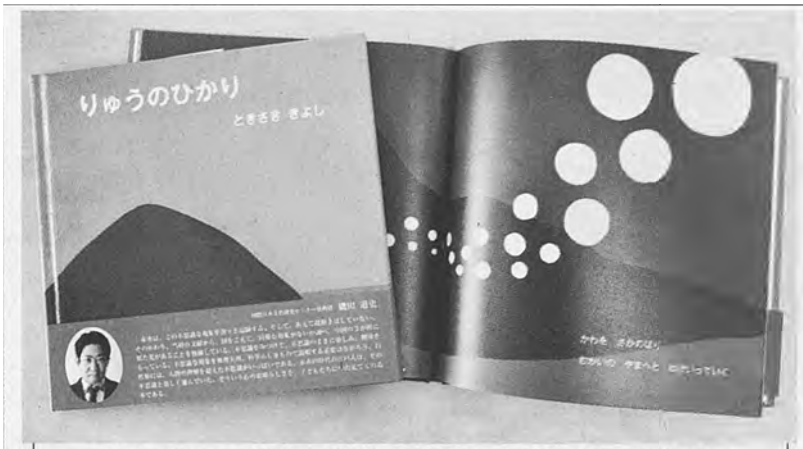
R2.４月８日　茨城新聞

# 赤水顕彰会が絵本発行

## 資料の重文指定決定記念

## 高萩 海の不思議、幻想的に

高萩市出身で江戸時代の地理学者、長久保赤水（1717～1801年）の功績を伝える長久保赤水顕彰会（佐川春久会長）は、赤水が地図上に書き残した海の不思議な現象の記述を基に、絵本「りゅうのひかり」を発行した。光る玉が海で生まれ竜の姿へと変わり、やがて林の中で滴になって消える様子を幻想的に描いている。同顕彰会は、赤水関係資料の国重要文化財への指定決定を受け、記念事業として製作した。



長久保赤水顕彰会が発行した絵本「りゅうのひかり」

赤水は「改正日本輿地路程全図（赤水図）」の第2版（1791年）で、現在の福島県いわき市四倉沖の箇所に「閼伽井嶽の龍燈」と呼ばれる現象について記した。

四倉沖の海で毎晩、かがり火ほどの大きさの火が発生、川をさかのぼり閼伽井嶽の麓に達し、林の中に消える。現象は夜の始めから翌日の日の出まで途切れることなく続き、閼伽井嶽からしか見ることができない―という内容だ。

絵本は、同会会員の時崎清（ペンネームときさききよし）さん(69)＝高萩市島名＝が、現象についての記述からイメージを浮かべ起案した。

赤水図は地形と地名が詳細に書かれている地図だが、四倉沖のほか九州の福岡県沖や有明海にも不思議な現象についての記載がある。佐川会長は「赤水は世の中の不思議なことを地図に残したいという気持ちがあったのではないか。（絵本から）真摯な学問の姿勢を知ってほしい」と話す。

時崎さんは、不思議なことを全て科学的に解明しようとするのではなく「自然に耳を澄ませ、そのまま受け止める大切さを感じてもらえれば」と語った。

儒学や天文学、地理学などを学んだ赤水は1779年に赤水図の初版を完成。正確な地形と豊富な地名を記載し、庶民に広く普及した。国の文化審議会は3月、赤水の関係資料を国指定の重要文化財（美術工芸品）にするよう萩生田光一文部科学相に答申。夏ごろまでに答申通り指定される。

（小原瑛平）

「改正日本輿地路程全図」2版

### 赤水の手紙

（長男・藤八郎へ…續長久保赤水書簡集現代語訳から抜粋）

（前略）殊に来年の正月ついたち（注1天明六年〈一七八六〉正月元旦）には、日食がある。一日の朝の日食は昔から現在まで調べてみると、凶作か、戦乱（乱世）か、とにかく変った事が起こる可能性があるという。用心するように。（略）大凶年になって餓死する人が出るような時は金を持っていても人を救うことは出来ない。ただ穀物だけが人を救うことが出来るので、金を貯える事を考えず、穀物を備蓄するように今年は心がけよ。来年の正月（虫損）以降は、大変になると懸念される。

注1天明六年【この年、赤水の予言の通り、高萩地方では、五月から雨が降り続き冷気。七月十二日から十八日までの昼夜、間断なく大雨が降り、大洪水が起こった。この大凶作のため、関東地方や東北地方だけでなく日本国中の農村も大きな被害にあい荒廃している。】

R2.４月２日　朝日新聞

# 赤水さん　地図に広がる いきいき人生

## 1 目覚め

# 父母他界 不運な少年時代

これから長久保赤水（以後、赤水さんと呼びます）のことを書きます。と言ってもけげんに思う人もいるかもしれませんので、長久保家の一族で、「地政学者　長久保赤水伝」（暁印書館）などの著書も多い長久保片雲（本名・源蔵）さん（89）＝高萩市＝に語ってもらいます。

「彼は通称を源五兵衛といい、農民の長男として今の高萩市赤浜で生まれ、35歳ごろから日本地図を作り始めた人なんです。彼が作った地図は、当時としてはもっとも信頼され、ひとびとに愛用されたんですね」

農民の子ながら、ひとびとに愛用される日本地図を作った人が茨城県にいたなんて。赤水さんってどんな生い立ちなのか、とっても気になります。

西暦で言えば江戸時代中期の1717（享保2）年11月、当時の常陸国赤浜村で生まれます。彼は虚弱児だったらしく、早くも医師からこう告げられたというんです、「この子は40歳まで生きられないだろう」と。ところが実際は数えで85歳という長寿を全うされたんですね。けれど、不運な少年時代を過ごします。

8歳のとき弟を亡くします。翌年に母のおしげが亡くなり、その2年後、今度は父の善次衛門が亡くなります。彼は11歳で肉親を失ってしまうんです。

特に母の死は彼にとって大きな衝撃だったに違いありません。と言うのは、母から文字の読み書きを教えられたことで彼の知的欲求は芽生えたからです。当時は紙も貴重品。なので母は丸いお盆に載せた白い砂に指で文字を書き、我が子に伝えたのです。赤水さんもひとつ覚えると次が知りたくなり、好奇心をどんどん深めていくのでした。

「なにしろ夕立がきても庭に干した麦を取り込むことを忘れるほど読書に夢中だったので、父親にこっぴどく怒られたぐらいなんですよ」（片雲さん）

もっとも生家は庄屋でしたから村政に携わる関係上、読み・書き・そろばんができなければ務まりません。けれど母の死で文字を覚える手立てを失います。ここで彼を救い、後々まで支えたのが継母のおかんでした。

父の善次衛門は妻を亡くした翌年、おかんと再婚します。しかし、その1年後、今度は善次衛門が亡くなります。おかんは実父から「離縁して実家に戻れ」と告げられます。おかんがこれに従えば、赤水さんはまったくの孤独。けれどおかんは勇敢でした。実父の言葉をきっぱりと拒否したのです。幼い赤水さんを残して実家に戻るという、そんな薄情にはなれなかったのです。以来亡くなるまでの約25年間、おかんは赤水さんとともに暮らします。

（フリーライター・岡村青）

伊能忠敬の地図より42年も早い1779年に完成した「改正日本輿地路程全図（初版）」＝高萩市歴史民俗資料館蔵

晩年の長久保赤水を描いた肖像画＝県立図書館蔵

伊能忠敬（1745～1818）が全国を測量して作製した「大日本沿海輿地全図」より42年も早く、農民出身の長久保赤水（1717～1801）は、収集した様々な地図と旅人らの情報を元に、当時としては最も信頼性が高く、利便性に優れた「改正日本輿地路程全図」を完成させます。

この人物の生涯を岡村青さんがゆかりの人や土地を訪ねて紹介します。岡村さんは真壁町（現桜川市）生まれで、「血盟団事件　井上日召の生涯」（三一書房）や「十九歳　テロルの季節」（現代書館）など著書多数。

連載は原則木曜日に掲載します。

## 赤水の手紙

（次男・四郎次へ…續長久保赤水書簡集現代語訳から抜粋）

（前略）なお、老人（赤水）の食事は、第一に菊を賞味することである。去年から菊の花が不足している。藤八郎からも大分送られて来るが、欲を言えばまだ不足している。今年の秋はどのようになるのか。去年の花のように少なくては残念である。藤八一家だけでは間に合い兼ねると思うので、隣近所、知り合いの所へも少しずつ頼んでもらい集め、たくさんもらいたい。毎日の食事に砂糖漬け、味噌漬けなどにもいろいろ調理して食べたい。第一に目の薬にするので、長命を願うものではない。死ぬまで眼の力の助けになる薬味なので欲しいのである。川尻のお竹（赤水の娘。川尻村〈現日立市〉の丹藤左衛門貞雄へ嫁す）にもついでに話してくれれば、鮑の腸の塩漬け（塩辛）を時々少しずつ、ついでに贈ってくれるようにしてほしい。これも私の薬味にしたいものだ。

# 赤水さん　地図に広がる いきいき人生

## 2 継母

# 肝っ玉おかんあっての「偉業」

江戸時代中期の1779（安永8）年、数え63歳のとき、日本で初めて緯線と方角線の入った全国地図「改正日本輿地路程全図」を作製した常陸国赤浜村（現高萩市赤浜）の長久保赤水さん（1717～1801）。生家は水戸とみちのく仙台を結ぶ街道に面していました。地元では「奥州道」と呼んでいたようで、生家前は往来する旅人が絶えませんでした。

「ここが赤水の誕生地です。けど彼がここにいたのは8歳まで。その後、彼の父が分家するからです」

高萩市赤浜の長久保総本家の跡地に立つ「長久保赤水誕生地」と深く刻まれた石碑の前で、一族の長久保片雲（本名・源蔵）さん（89）はこう説明してくれました。現在ここには片雲さんが住んでいます。

片雲さんに車に乗ってもらい、旧街道を通って赤水さんが暮らした分家に向かいました。「赤水はこの道を何度も往復したし、後に日本地図を作った伊能忠敬も、東北旅行に向かった吉田松陰も歩いたものです」

途中、赤水さんの墓地があり、参拝。黒ずんだ赤水さんの墓石の右に父の善次衛門、母おしげ、継母おかんの墓が並んでいました。

赤水さんの旧宅まで車で5分。こちらも旧街道沿いです。いまの国道6号と交わる北茨城市との境付近。赤水さんが測量をせずに詳しい日本地図を作製できたのは、家の前を行く旅人らを呼び止めて地名や地形の話を聞いていたからなんですよね。そしてここは両親亡きあと、赤水さんが継母のおかんとともに農業、学問に励んだ場所です。

赤水旧宅の門の一つ。旧街道に面している

長久保赤水の誕生地を紹介する長久保片雲さん＝いずれも高萩市赤浜

善次衛門と再婚したおかんは1年たらずで寡婦となり、実父から実家に戻れと迫られます。けれど、夫の遺言を守るのです。善次衛門はおかんを病床に呼んで伝えます。「私がいなくなればこの子は孤児になる。おまえが腹を痛めた子ではないので頼むのは心苦しいが、これから先も面倒を見てもらえまいか」と。

おかんは遺言を受け止め、赤水さんを無事に育てることを心に誓います。雇っていた農民夫婦とともに田畑を切り盛りします。

赤水さんにとってなによりも心強かったのは学問に打ち込むことを理解してくれ、温かく見守ってくれたことです。長久保本家のおじが「本を読みながら農作業をやるとは何事だ。農民のせがれに学問は無用だ」と赤水さんをたしなめたのに対し、おかんは「ひとは誰でも道楽のひとつやふたつはあるもんで、ばくちや酒飲みなんかより文章を学ぶほうがいいにきまってましょ」とかばうのでした。

おかんは赤水さんが14歳のとき下手綱村（現高萩市下手綱）の医師、鈴木玄淳が開く私塾に通わせます。

赤水さんは他の塾生と切磋琢磨して、次第に才能を開花させていくのです。

（フリーライター・岡村青）

＝原則木曜の掲載です

## 赤水の手紙

（孫の作之丞【藤八郎の長男】へ…續長久保赤水書簡集現代語訳から抜粋）

（前略）少しでも隙があったならば昼夜ともに読書を怠ってはならない。（略）書物に向かった時には、祖父（赤水）の顔を見るのと同様に心得怠けてはならない。

赤水さん　地図に広がるいきいき人生

## 3 きっかけ

# 道迷い着想？サービス精神満載

数え14歳から通った常陸国下手綱村（現高萩市下手綱）の私塾でめきめきと才能を伸ばした長久保赤水さん（1717～1801）は32歳の頃、奥州いわき（いまの福島県）の寺に招かれます。「論語古訓」の講義を頼まれるんです。

「この頃だと思うんですよね。途中で道に迷ったりして、地図の必要性を痛感したんじゃないかなあ」

江戸中期から明治にかけてベストセラーとなった日本地図「改正日本輿地路程全図」（通称赤水図）を63歳で作り上げた赤水さん。一族の長久保片雲（本名・源蔵）さん(89)＝高萩市＝に「なぜ地図作りに目覚めたのでしょう？」と尋ねたところ、返ってきた答えがこれでした。赤水さんは35歳の頃から、地図を書き始めたといわれています。

でも、赤水図を見ると本当に道に迷ったんじゃないかと思わされます。街道、河川、宿場、名所・旧跡などが詳細に書き込まれています。だから発売されるとたちまち評判となり、旅行に、ビジネスにと愛用されるんです。

その地図がなんと、石岡市の綿引正義さん(73)方に伝わっています。歴史の重みを感じます。でもなぜ綿引家にあるのでしょう。

「5代前の政八郎のものではないかと想像しています。うちは私で28代目ですが、江戸時代末ごろまで松本屋という旅館をしていました。政八郎は信心深い人で、全国の神社仏閣に参拝するためによく旅行していたので、この地図を頼りに歩いていたと思うんです」

赤水図がベストセラーになった理由は、誰もが自由に購入できたという点にあります。ここが伊能忠敬（1745～1818）の「伊能図（大日本沿海輿地全図）」とは大きく違います。忠敬は当初こそ自費で地図作製に取り組むのですが、やがて幕府のお墨付きを得て、資金、人材、物資などの援助を受けて全国を測量します。そのため完成した地図は幕府所有の「マル秘」扱いでした。

綿引さんは語ります。

「（赤水の）地図は折り畳み式でしたが劣化がひどくなったので、祖父が表具師に頼んで掛け軸にしたんです。骨董屋も売ってくれと来ますが、手放すつもりはないですね。家宝です」

精度の高さに加えて、折り畳み式である点も赤水図の画期的なところ。「ハンディータイプ」なのです。

赤水さんって頑固な面もあったようですが、地図を買ってもらうためにはあれこれ工夫する。初版をバージョンアップさせた2版では浅間山や阿蘇山に煙を立ち上らせ、那智の滝も描き入れたんですよ。サービス精神が旺盛で、着想もユニークなエンターテイナーだったと思うんですね。

次回は再び、地図作りに目覚める前の20代の赤水さんに話を戻します。

（フリーライター・岡村青）

＝原則木曜の掲載です

㊤綿引正義さん方に伝わる「赤水図」
㊦「赤水図」を所有する綿引さん。見ているのはレプリカ＝いずれも石岡市

### 赤水の手紙

（長男・藤八郎へ…續長久保赤水書簡集現代語訳から抜粋）

（前略）殿様は年貢の上がりが悪く手元不如意（意の如くならず経済的に苦しいこと。思い通りにならないこと）のためお借り上げ（藩が一般から金を先借りすること）という新法を定められた。でもこれは一時的なことで、たかだか三年か五年の内に元のようになされるであろう。（略）当節のお借り上げなどは予定外の事である。これらの事は赤水が政策をさし上げたのでこのようになったご政務なのである。将来うまくいくように愚案したものである。

R2.4月23日　朝日新聞

赤水さん　地図に広がる いきいき人生

## 4 よき師よき友

# 大学者から返事が来ちゃった

江戸時代のベストセラーとなる日本地図「改正日本輿地路程全図」（赤水図）を世に送り出すほどの大仕事をする人はやはり、よき師、よき友に恵まれるんですね。長久保赤水さん（1717～1801）を見るとつくづくそう思います。

20代の赤水さんはまだ、地図作りに目覚める前です。農作業の傍ら、常陸国赤浜村（現高萩市赤浜）から下手綱村（現同市下手綱）の医師鈴木玄淳の私塾に通い、仲間と詩文、漢文などに励みます。

一方、さらに知識を深めるために水戸藩の儒者名越南渓に封書を送ると、返事が来ちゃったんですね。赤水さんは小躍りして喜んだに違いありません。何しろ南渓は当代きっての大学者。若い頃は林家の私塾（昌平坂学問所の前身）で塾頭、後に彰考館の総裁を務めることになる人なんですから。

返書には学問をこころざす者の心構えが説いてありました。四書五経、漢書、後漢書など中国の史書の熟読をすすめ、「結局、学問は心がけ次第。（修めるには）人生の半分以上はかかる仕事です」と諭し、最後に「書では言い尽くせませんので、お会いしてお話ししましょう」と結ぶのです（長久保赤水顕彰会発行『現代語訳　長久保赤水書簡集』から）。

恩師の名越南渓から「（学問は）人生の半分以上はかかる仕事」と手ほどきを受けた手紙＝高萩市歴史民俗資料館蔵

南渓は現在の福岡県生まれの九州男児。酒豪で些事にこだわらず、服装も気にしないことから「ボロ十蔵」（十蔵は通称）と陰口をたたかれたほどの豪傑。赤水さん、20代半ばで南渓に入門します。

鈴木玄淳の私塾も忘れられませんよ。玄淳と赤水さんら門人はみな優秀で、地名から「松岡七賢人」とたたえられるほどでした。特に柴田平蔵とは馬が合い、よき友でライバルの平蔵が亡くなった時は、弔辞で6回も「嗚呼哀哉」と嘆いたほどだったんですね。

そんな賢人たちを育てた玄淳のお墓は、高萩市下手綱の「いわん坂」途中の高台にあります。管理しているのは渡辺文昭さん(75)と律子さん(67)のご夫婦。春と秋の彼岸と夏のお盆には墓を洗い、草を抜き、花と線香を手向けています。

鈴木家の墓を管理する渡辺文昭さんと律子さん。大きい墓が玄淳、小さい墓は玄淳の妻、阿清（おきよ）＝高萩市下手綱

「嫁に来た時には誰のお墓か分からなくてね」と律子さん。文昭さんも「おやじが大切に墓守をしてたんだけど、亡くなる前に、渡辺家との関係を詳しく聞きそびれてしまったんだ」と少々、照れた様子です。

ではここで再び、長久保家の一族で赤水さんに詳しい長久保片雲（本名・源蔵）さん(89)にご登場いただくと……。

「玄淳先生の私塾は渡辺さんちの敷地内にあったとみられるんです。渡辺さんの先祖は、能筆で知られたまな弟子ですよ」

赤水さんは数え23歳で、またいとこのお順を妻にめとります。25歳で長男、27歳で次男が生まれ、学問も家庭生活もますます充実した時期なのです。

赤水さんはいよいよ、地図作りに踏み出します。

（フリーライター・岡村青）

＝原則木曜の掲載です

### 赤水の手紙

（長男・藤八郎へ…續長久保赤水書簡集現代語訳から抜粋）

（前略）殿様や大炊頭様（目白公）、中山殿（治保の弟。水戸藩附家老中山備前守信敬）などより時々政治についてご質問がある。私の考えをお用いになられることもあり、即ち天理にかなった事もあるのだろうと思う。これもまた当然のことで有り難いことだと思っている。大能の野駒（大能村牧場の放し駒）の問題は解決した。この上ともに同じような事が出来れば本望である。例えば、子育ての事（奨励金）。御蔵前での貢納する事（蔵前でのモミ改めなど問題があった）。大豆にかける税金の事。贅沢を禁ずる事。賭博に罰金を払わせる事。寺社からの納入金を止める事。町人から金を借りる事は、無用の事。紙幣（藩札発行）はよろしくない事。いろいろな税金はとらないようにする事。右のことがらは皆、私のたてた政策である。これらの事についてみても、私が江戸に居ることは天命と思っている。だからこのまま江戸の土になろうとも天意（自然の道理）に任せようと思う。意見は無用である。

赤水さん　地図に広がる いきいき人生

5 世界は広い！

# 好奇心むずむず 異人と「違法」交流

お待たせしました。「赤水さん」は今週から再開します。話は常陸国赤浜村（現高萩市赤浜）の長久保赤水（1717～1801）さんが数え35歳の頃、いよいよ地図作りに着手するところからです。通称「赤水図」と呼ばれる「改正日本輿地路程全図」の完成は63歳。実に約30年をかけた大仕事の始まりです。

その姿は真面目一本だったようです。一族の長久保片雲（本名・源蔵）さん（89）＝高萩市＝が語ります。「とにかく謹厳実直なひとでした。一日の計は鶏鳴に在り、一月の計は朔旦（一日）に在り――。赤水は、鶏の鳴く声と同時に起床せよ、なければ夕刻に後悔する、という言葉をいましめにしていましたから」

自宅前の街道を往来する旅人を呼び止めては土地の名前や街道を聞き、入門した名越南渓のつて（？）で彰考館秘蔵の諸藩発行の地図も模写。天文学の知識も身につけました。

勉強に使った「天経或問」という中国の書物が残っています。ページの端には赤水さんの書き込み。地球とみられる円に「赤道」「緯度」「経度即東西」などと書いているんです。

地図は、障子に描き込んでいきました。タテヨコの格子を緯度経度に見立てたという寸法です。障子が日本地図に早変わり。さぞかし妻のお順はア然としたに違いありません。

でも、単に想像で地図を描いたわけではありません。実地検証もしています。44歳の夏、仲間7人で東北、新潟を旅します。彼は磁石を持参し、方位を調べているんです。

福島県の「いわき市暮らしの伝承郷」の夏井芳徳館長（60）が教えてくれました。「この旅では赤水の意外な一面が垣間見えます。茨城と福島の県境に近い勿来の切り通しを抜けるとき、『中は暗く、崖も崩れそうなので怖くなり急ぎ通り過ぎた』とか、『馬を見に行ったらハエとアブの大群にへきえきした』とか。あの真面目な赤水さんが、28歳の頃には福島沖に出て川をさかのぼる不思議な光「龍燈」を見ようと、いわき市の閼伽井嶽（標高605メートル）に登ります。夜に登って実際に見て、翌日の昼にも。「昼に登ったのは発生原理を探ろうとしたようです。その好奇心、学究心たるや相当なものです」

51歳の時には長崎行きのチャンスを得ます。近村の漁師がベトナムまで漂流し、水戸藩の役人と迎えに行くのです（自ら志願したという説もあります）。

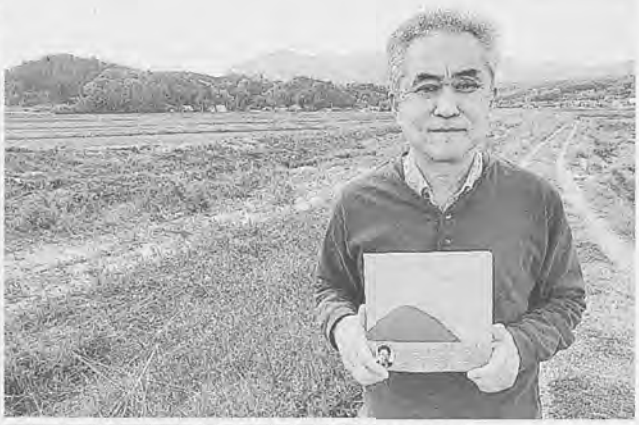
鎖国時代でも、江戸幕府は長崎でオランダや清（中国）と交易していました。赤水さんの好奇心がむずむずします。外国人との交流は「違法」を承知で、清国人と漢詩作りで腕比べ、オランダ人とも親しくなり、鳥の羽のペンで書いた横書きの文を初めて見るのです。

うぅーん、世界は広い！

赤水さん、地図作りに向けて、力こぶがいっそう大きくなるのです。

（フリーライター・岡村青）

＝原則木曜の掲載です



上 自身が解説文を寄せた「龍燈」伝説の絵本「りゅうのひかり」（長久保赤水顕彰会刊）を持つ夏井芳徳さん。後方中央のとがった山が閼伽井嶽＝福島県いわき市
下 天文・地理書「天経或問」に残る赤水の書き込み＝高萩市歴史民俗資料館蔵

## 長久保赤水と閼伽井嶽の龍燈

夏井芳徳さん（医療創生大学客員教授）

（前略）赤水が旅をし、書き残してくれた記述によって、私たちはかつての地域の人々の営みや地域の様子などをつぶさに知ることができ、また、それを足掛かりにして、地域の歴史をさらに深く研究することが可能になる。とてもありがたいことだ。しかし、赤水が私にもたらしてくれる学恩は、これだけではない。赤水が書き残した記述を読んでいると、その行間から、学問に対する赤水の強い思いや真摯な態度が伝わってくる時がある。「この世の中はどのようにして成り立っているのか？」この問いへの答えを見つけるため、赤水は強い思いを持って、日々、真摯に学び、探究を続けた。学問に対する強い思いを持ち、日々、真摯に学び、探究すること。私はこれらのことも、赤水から、しっかりと学び取らなくてはならないと思っている。また、その一方で、赤水が書いた文章を読んでいると、そこにユーモアに満ちた面白味を感じることがある。そのような時、私は赤水という人間が持つ魅力に強く惹き込まれている自分がいることに気づかされる。

## 赤水さん　地図に広がるいきいき人生

### 6 ブレーク！

# 大ベストセラーついに完成

JR高萩駅前に、2012年11月に建てられた長久保赤水（1717～1801）の銅像があり、駅前のランドマークとして乗降客に親しまれています。そこで聞いてみました、赤水さんて何者、と。

「江戸時代中期の儒学者で、日本地図をつくったといわれる人なんです」

板倉青哉さん(16)の答えは明快。それぐらい赤水さんは人々にすっかり定着しています。なので、「そのような人が高萩にいたことは誇りです」と及川賢信さん(15)がやや自慢げに答えるのも当然です。

じっさい赤水さんは農民出身ながら学者に転じ、緯線と方角線の入った日本地図を初めて刊行するという大事業を成し遂げ、一気にブレークする人でした。

数え52歳に達した赤水さん、まず「改製日本分里図」を完成させます。

「この地図がいわゆる赤水図（改正日本輿地路程全図）の元になる原図です。この後、修正を加えてより信頼性の高いものになってゆくんですが、この原図の完成まで実に約20年も費やしているんですねぇ」

長久保赤水顕彰会3代目会長の佐川春久さん(70)＝高萩市＝は感慨深く語ります。1枚だけの手書きの原図が現存することにびっくり。白色顔料を塗り重ね、和紙を貼り合わせて修正した跡が見て取れます。

赤水さんはこの頃、功績が認められて水戸藩の郷士格に列せられます。でも地図作りはこれからが本番。原図は端緒にすぎません。

1774（安永3）年、58歳の赤水さんは意を決して京都に向かいました。京都は文化と知識の宝庫。多彩な人士、文物に接し、そこで得た情報を原図に盛り込み、修正を重ねます。

そして5年。ついに「改正日本輿地路程全図」が出来上がるのです。赤水さん63歳、地図作りに取りかかってから約30年。当時としては最も信頼性が高く、あの伊能忠敬（1745～1818）が全国を測量して作製した地図より42年も前のことでした。彫り師が版木を彫り、彩色されて翌年、大坂で刊行されます。

ところが、これで止まらないのが赤水さん。75歳で第2版を完成させます。

これがまた、すごい。

「初版に書かれた地名は約4200ですが、2版では約6千。航路、古戦場、名所、関所、潮の流れも書かれ、阿蘇山や浅間山には噴煙も描き込まれました」

「それどころか、瀬戸内海の周防灘には『不知火が現れる』、新潟のところには『天然ガスが出るのが不思議』などと書いています。赤水が旅して見聞きしたことも盛り込んで、これは彼の知識の集大成です」

一気に語る佐川さん、興奮するのも分かります。赤水図は海賊版や模倣版が次々と出るほどの大ベストセラーになるのです。

ところで、赤水さんは61歳で第6代水戸藩主・徳川治保の侍講（家庭教師）に抜擢されています。高萩駅前の銅像はその姿。農民から藩主の先生になるって、いやはやなんとも……。

（フリーライター・岡村青）

＝原則木曜の掲載です

JR高萩駅前の長久保赤水像。手前は赤水が作製した「改正日本輿地路程全図」（2版）の陶板

「改正日本輿地路程全図」（2版）の常陸国部分。地名がびっしり＝高萩市歴史民俗資料館蔵

## 赤水の手紙

（孫の作之丞【藤八郎の長男】、次男・四郎次、三男・大塚文右衛門へ…続長久保赤水書簡集現代語訳から抜粋）

（前略）私が若い時に借りて、田畠へ出る時にも懐へ入れて学問に励んだ。さて、学者も普通の人も、人を知ることが肝要である。善人を知って、師とし友として交際すれば、日々に月々に利益がある。悪い人を近づければ日々に利を失う。（略）私心なく公正に行動する人を君子という。私心がないというのは、自分の心におこる欲望を捨てて仁義の道に随って行動することである。公正とは正直誠実な心を持つ人を愛する事、他人とも親しみ合い、嘘、いつわりを言い、不正の道を歩み不孝不義の怠け者、酒・女色・博奕を好む者は我が子、兄弟、そのほか親類といえども遠ざけて親しんではいけない。（略）とにかく、人を知ることを第一の学問とすべきである。（略）天下の中で正直で律儀の人、親孝行で忠義と真実を守る人を子弟の如くに付き合うように。世の中の人の中に、不義不孝で、酒、女色、博奕の三悪を好み、家業をおろそかにする者は悪人である。悪人は天下の罪人であり、そのような人を早く見究めて交わらず遠去けるようにせよ。他人は勿論、親族であっても油断しないこと。但し、甚だしくこれを憎むと仇で返すこともあるので、強くその非を責めるべきではない。（略）悪い人を見てもそれを鏡として、自らを戒めて行いを正しくし、酒・女色・博奕を好まず、家業にだけ精進して、少しでも余力がある時には、書物を読み、古の人を友とすること。世の中にこれほどの楽しみはない。これを天命を楽しむという。

R2.5月8日　山形新聞

江戸時代の地理学者、長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」　（高萩市教育委員会提供）

# 注目度高まる　長久保赤水

## 江戸時代、日本地図研究の先駆者

## 出身地の茨城　絵本出版や顕彰の動き

茨城県高萩市出身で江戸時代の地理学者、長久保赤水（1717～1801年）が近年、知名度を上げている。初めて実測で日本地図を作った伊能忠敬より42年早く、情報収集による精度の高い「赤水図」を作り、庶民や後世の知識人に広めた功績が評価され始めた。

赤水は高萩市赤浜の農家生まれで、水戸藩の学者らの下で儒学や地理学を学んだ。30代半ばで正確な日本地図を作ろうと決意し、情報収集や各地の旅を経て、52歳で初めての地図を完成。功績が認められ水戸藩主の侍講になった。赤水の地図は天文学を取り入れたことで、日本で初めて経線と緯線が書かれ、比較的正確なのが特徴。中でも1779年に初版が完成した「改正日本輿地路程全図」（通称・赤水図）は実用性が高く、江戸時代の庶民に広く流通した。幕末の志士を育んだ吉田松陰（1830～59年）が兄に宛てた手紙には「これが無くては不自由」と、旅に役立てていたことが記されている。

1821年に完成した伊能忠敬の地図は、伊能自らが実際に各地を歩き歩幅で測量したことで有名。一方で赤水は、自分で集めた地名などの情報を地図に盛り込んだため、内陸の情報も豊富だ。長久保赤水顕彰会の佐川春久会長（70）は「友人が多く、旅人にもお茶をごちそうして話を聞くなど、情報収集能力にたけていた」と強調する。赤水の関連資料693点は、2017年に県指定有形文化財になるなど徐々に価値を評価され、国の文化審議会は今年3月、同資料を国の重要文化財に指定するよう文部科学相に答申した。

さらに知名度を上げようと顕彰会は同月、赤水が地図に書き残した不思議な海上現象を元にした絵本「りゅうのひかり」を出版。縦約84㌢、横約128㌢の赤水図のレプリカ発行を目指し、資金300万円をクラウドファンディングで募る。佐川さんは「世界で通用する、誇れる先人の一人。地理の歴史の中に赤水図をしっかり位置付けたい」と語り、将来的には大河ドラマ化も目指している。

R2.5月11日　茨城新聞

論説

赤水資料の重文指定

# 先人の偉業に学びたい

高萩市出身で江戸時代の地理学者、長久保赤水（1717～1801年）の関連資料計693点が国の重要文化財に指定されることになった。指定されるのは日本で初めて経緯線のある全国地図を完成させた赤水の資料群で、国の文化審議会が文科相に指定するよう答申。夏ごろまでに答申通り指定される見通しだ。県民にとって新たな誇りとなる。

長久保赤水顕彰会が長年にわたって埋もれていた資料の収集・整理や赤水の功績を伝える活動を続け、その活動を市も支援。市職員時代から顕彰会の活動を主導し、重文指定という悲願を達成した佐川春久会長は「非常にありがたいことで、ようやく第一歩が踏み出せた」と喜びを語る。今後は教科書への掲載や大河ドラマ化を目指す。

重文に指定されるのは、赤水の複数の子孫宅に伝承してきた一括資料で、地図・絵図84点、文書・記録279点、典籍274点、書画・器物56点の計693点。赤水の学問の内容や交友関係、生涯の実績を考える上で最もまとまった資料群で、学術的な価値が高い。

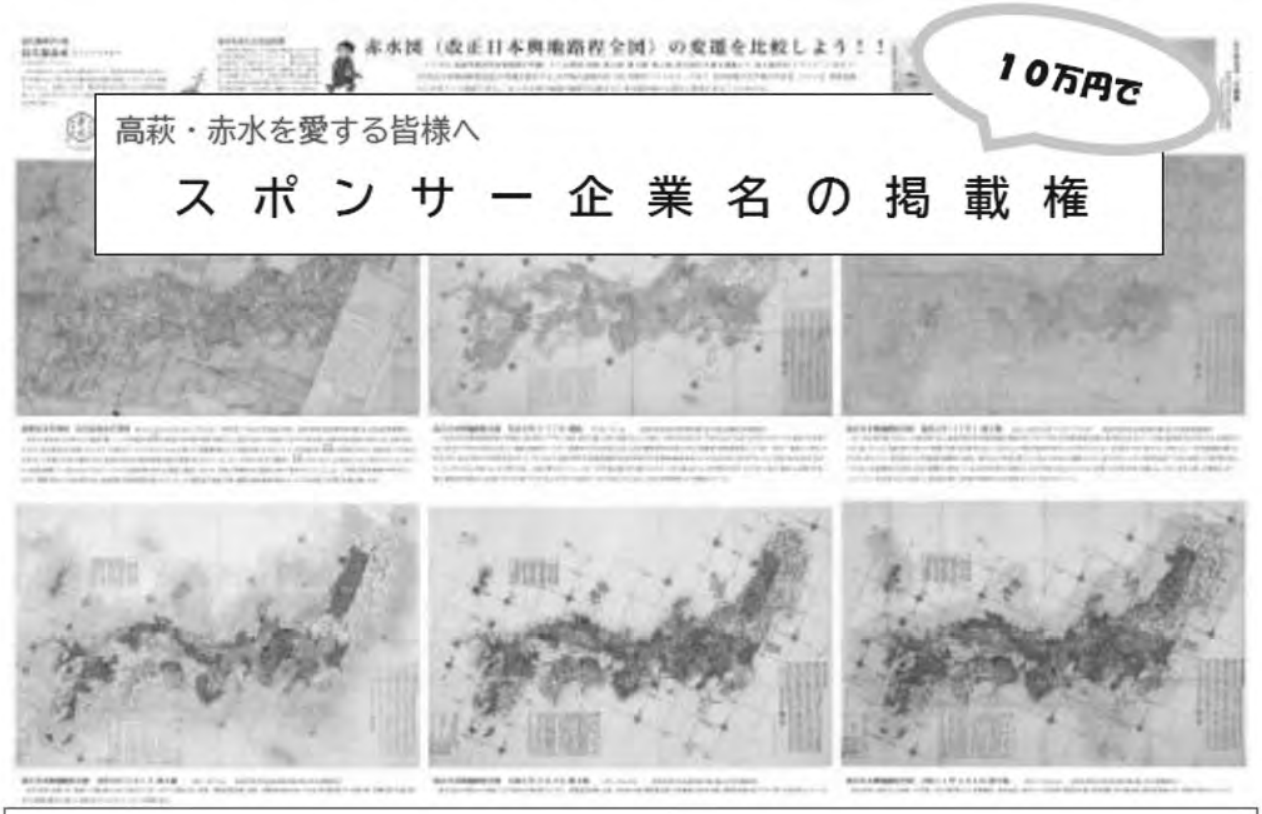
赤水が天文学の知識を取り入れて1779年に完成させた日本地図「改正日本輿地路程全図（赤水図）」は江戸時代の庶民の生活を支え、広く愛用された。伊能忠敬が作成した「大日本沿海輿地全図」ができる42年ほど前のことだった。忠敬の地図は、いわゆる国家秘密とされ、幕府の厳重な管理下にあったため、庶民が目にすることはなかった。赤水は地図作成の先駆者と言える。

赤水図は129万6千分の1の縮図で、10里（約40㌔）が1寸（約3㌢）。大きさは縦84・6㌢、横128・8㌢。国境や関所、城下町、名所など10種類の記号が使われている。35歳ごろから地図を学び始めた赤水は先人による地図や地誌、官製の国絵図など多くの史料を基に編集。自身の実体験や多くの旅人、知人からの話も参考にして20年以上の歳月をかけて完成させた。初めて経緯線を用い、方角が正確に分かり、天文学の知識を取り入れたことも画期的とされる。

農家に生まれた赤水は農民の苦しみも救った。61歳ごろ、水戸藩6代藩主徳川治保に学問を教える侍講に抜てきされた。極めて異例のことで、赤水は政治にも明るく、今で言えば政策アドバイザー的な立場だったという。その治保公に「農民疾苦」という書を提出し、年貢取り立ての運用で苦しめられていた農民を救うために制度の改善を求めた。直訴が禁じられていた時代に成した功績だった。佐川会長は赤水の人柄を「非常に真面目できちょうめんな人」と思いやる。

顕彰会は2012年にJR高萩駅前の広場に赤水の銅像と赤水図の陶板を建立。赤水の旧宅を活用して、市と調整しながら「赤水記念館」として改修する構想もある。観光など地域活性化にも生かしていきたい考えで、佐川会長は「地図を勉強している学生がたくさんいるので、高萩に来て見てもらいたい」と語る。重文指定をきっかけに学術的にも赤水の業績の全容が解明されることを期待している。

今回は「一橋徳川家関係資料」（県、県立歴史館保管）も国の重文指定となる見通しだ。赤水の功績とともにあらためて本県の歴史を学ぶ契機としたい。




こちらに企業名を記載させて頂きます。